85.　インド仏教における空と実在論の関係を問い直す：チャンドラキールティの思想を中心に

筑波大学　人文社会系　助教　　横山　剛

概要

仏教の原点であるインド仏教では、有力部派の一つである説一切有部が主張する実在論を大乗仏教の中観派が空の立場から批判したことが知られている。本研究は（1）中観派と有部の関係をチベット仏教の教理にもとづいて理解することの是非に関する考察、(2)「有部が説くダルマの体系＝実在論」という見方の再考、(3)『中観五蘊論』に関する研究成果の出版、という三つの作業を通じて、チャンドラキールティの思想を中心に、インド仏教における空と実在論の関係を問い直すことを目的とする。

（1）では、『中観五蘊論』をチャンドラキールティに帰すことを疑問視するツォンカパの見解を検討することで、その背後にチベット仏教独自の学説誌的な理解やチャンドラキールティ観があることを指摘した。(2）では、五位七十五法の特徴やダルマの体系が説かれる際の目的等の考察を通じて、ダルマの体系が有する多面的な機能について明らかにした。(3）については、本研究を開始した時点では『中観五蘊論』のチベット語訳の校訂テキストのみを出版する予定であったが、思想研究の成果も合わせて研究書として刊行するように計画を変更した。このために助成期間を 1 年間延長して研究を継続し、計画通りに研究書を出版した。

以上の研究を通じて、有部教学と中観思想に関して従来の研究で前提とされてきた理解や対立観を乗り越えて、その連続性やこれまで看過されてきた関係性を明らかにすることができた。

背景および目的

インド仏教の数ある部派の中で大きな勢力を誇った説一切有部（Sarvāstivāda, 以下、有部）は、仏教における基礎的な教理概念を整理する中で、それらを根源的な性質を有するダルマ（dharma, 法）という実体として捉え、それを体系化することで、実在論を主張した。一方、その後に起こった大乗仏教では、諸々の事物が本質を欠くこと（すなわち、空であること）を主張する中観派（Mādhyamika）が台頭し、有部の実在論に批判を加えた。しかし、有部が説くダルマの体系は仏教の根幹をなす教理概念によって構成されているために、中観派もこれを完全に否定することはできず、基礎学として自派の教説に位置づけた。中観派の論師たちは、有部説への批判を通じて、自派の教説を展開するが、その際にダルマの体系をまとめて解説することはなく、彼らが念頭に置くダルマの体系の具体的な姿を知ることは容易ではない。このような状況にあって、中観派の視点からダルマの体系を解説するチャンドラキールティ（Candrakīrti, 7 世紀頃）の『中観五蘊論』（**Madhyamakapañcaskandhaka*, サンスクリット原典が散逸し、チベット語訳のみ現存）は、有部教学に対する中観派の理解を研究するために貴重な資料となる。同論に関する諸問題の中でも、著者問題と著作目的の解明はとりわけ重要な課題である。

『中観五蘊論』の著者について、池田［1985］や岸根［2001］等の研究は、論全体をチャンドラキールティに帰すことに疑問を呈する。このような先行研究の指摘の背景には、〈チベット仏教における理解を通じてのインド仏教へのアプローチ〉と〈有部が説くダルマの体系に対する実在論としての一元的な理解〉という二つの問題があると考えられる。チベット仏教の伝統的な理解によれば、チャンドラキールティは二義的な真実（世俗諦）としても、有部の教理を認めることはないとされる。またこれまでのインド仏教研究では、「ダルマの体系＝実

在論」という一元的な理解や「小乗 vs 大乗」という対立観によって、有部に対する中観派の批判のみに注目が集まり、有部教学の基礎学としての役割が看過されてきた。

（1）中観派と有部の関係をチベット仏教の教理にもとづいて理解することの是非に関する考察、ならびに（2）「有部が説くダルマの体系＝実在論」という見方の再考、という二つの課題については、一年目で研究の大半を完了しており、その結果は『第 54 回 2023 三菱財団研究・事業報告書』（公益財団法人三菱財団、2024 年 8 月）において報告済みである。二年目の主な目的は、本研究の三つ目の課題である（3）チベット語訳の校訂テキストと思想研究の成果を一つの研究書にまとめて出版することにある。

方法

本研究では、文献学的な手法を用いて、(1）中観派と有部の関係に対するチベット仏教にもとづく理解の再考、(2)「有部が説くダルマの体系＝実在論」という見方の再考、(3)『中観五蘊論』に関する研究成果（思想研究とチベット語訳校訂テキスト）の出版、という三つの作業を通じて、チャンドラキールティの思想を中心に、インド仏教における空と実在論の関係を問い直す。

結果とまとめ

一年目の研究内容と得られた結果の詳細については前年の報告書に譲るものとし、以下では一年目の研究との関連を示しつつ、二年目の研究内容と成果を報告する。

（1）については、一年目に『善説金鬘』と『灯作明複注』における『中観五蘊論』をチャンドラキールティに帰すことを疑問視するツォンカパの見解を検討することで、その背後にチベット仏教特有の学説誌的な理解やチャンドラキールティ観があることを明らかにし、その内容を学会と論文において発表した。二年目の研究では、以上の研究成果に加筆や修正を行った上で、本研究において刊行する研究書の一部として収録した。

（2）については、一年目に五位七十五法の特徴や有部のダルマの体系が有する多面的な機能について検討を行ったが、二年目はそこで得られた成果を論文にまとめて、『哲学・思想論集』50（2025 年 3 月）に発表した。

（3）については、『中観五蘊論』のチベット語訳の校訂テキストだけでなく、思想研究の成果も合わせて研究書として刊行するという新たな目標を立てて、助成期間を 1 年間延長して、研究を継続した。二年目は特に、報告者がこれまでに取り組んできた同論に関する思想研究の成果を、加筆と修正を行いながら、出版に向けたかたちにまとめる作業に多くの時間を費やした。その後、新たな計画の通りに、2024 年 9 月に起心書房から『チャンドラキールティ『中観五蘊論』の研究―説一切有部アビダルマ教学からのアプローチ―』（415 頁、ISBN: 978-4-907022-31-0）を出版した。同書の構成の概要を示せば、以下の通りである。

はじめに
目次
凡例
略号

第一部　思想研究
『中観五蘊論』に関する基本事項の確認
1. なぜ〈五蘊〉なのか
2. 法体系の諸相
3. 自性の否定
4. 著者問題
5. 後代への影響
思想研究のまとめ

第二部　テキスト研究
　シノプシス
　チベット語訳　校訂テキスト

資料 1『入阿毘達磨論』と『中観五蘊論』の構成の比較
資料 2『中観五蘊論』『牟尼意趣荘厳』『有為無為決択』の構成の比較

あとがき
初出一覧
参考文献
索引

二年間を通じて取り組んだ（1）から（3）の研究によって、有部教学と中観思想の連続性やこれまで看過されてきた関係性が示され、インド仏教における教理的展開の新たな一面が明らかとなった。

本研究で得られた知見は、報告者が取り組む他の研究においても、重要な役割を担っている。アバヤーカラグプタ著『牟尼意趣荘厳』における有情世間の解説や、ダシャバラシュリーミトラ著『有為無為決択』における智の分類や器世間等の解説を考察する際にも、本研究の成果を念頭に分析を進めることで、有部教学からインド仏教最後期への教理的な展開の一端を解明することができた。特に智の分類については、主に『二万五千頌般若』の教説にもとづいて、大乗仏教からの思想的な影響にまで踏み込んだ分析を行った。これらの研究成果についても、日本印度学仏教学会学術大会（2024 年 9 月）において発表するとともに、その内容を論文にまとめて『インド学チベット学研究』28（2024 年 12 月）、*Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies*, vol. 7（2024、採録決定・印刷中）、『印度學佛教學研究』73-3（2025 年 3 月、採録決定・印刷中）、『対法雑誌』6（2025 年、採録決定・印刷中）に発表した。

謝辞

本助成の下で研究に取り組むことで、自らの研究を前進させ、その成果を学会発表、論文、著書というかたちで公表することができた。また、研究の進展に応じて、助成期間の延長等の措置をいただくことで、研究をさらに前進させ、当初の予定を上回る成果を得ることができた。本研究を遂行する貴重な機会を与えてくださった三菱財団に心より感謝を申し上げたい。

（完）

発表論文等

1）［著書］横山剛、『チャンドラキールティ『中観五蘊論』の研究―説一切有部アビダルマ教学からのアプローチ―』、起心書房、神奈川、2024 年 9 月。

2）［論文］李学竹・加納和雄・横山剛、「梵文和訳『牟尼意趣荘厳』―有情世間解説後半部―」、『インド学チベット学研究』28、21–34、2024 年 12 月。

3）［論文］Takeshi Yokoyama, Chapter III of the *Saṃskṛtāsaṃskṛtaviniścaya*: A Critical Edition of the Tibetan Text, 『インド学チベット学研究』28, 244–267, 2024 年 12 月。

4）［論文］Takeshi Yokoyama, Chapters V–VII of the *Saṃskṛtāsaṃskṛtaviniścaya*: A Critical Edition of the Tibetan Text, *Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies*, vol. 7, 2024.（採録決定・印刷中）

5）［論文］横山剛、「説一切有部の法体系をいかに見るべきか―〈五位七十五法観〉をめぐって―」、『哲学・思想論集』50、105–119、2025 年 3 月。

6）［論文］YOKOYAMA Takeshi, On Elevenfold Knowledge (*jñāna*) in the *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, 『印度學佛教學研究』73-3, 2025 年 3 月.（採録決定・印刷中）

7）［論文］横山剛、「チベット文和訳『有為無為決択』第三章」、『対法雑誌』6、2025 年。（採録決定・印刷中）

8）［口頭発表］横山剛、「『二万五千頌般若』が説く十一智をめぐって」、日本印度学仏教学会第 75 回学術大会、2024 年 9 月、駒澤大学。

引用文献

1） 池田練太郎、「Candrakīrti『五蘊論』における諸問題」、『駒澤大學佛教學部論集』16、23–45、1985。

2） 岸根敏幸、『チャンドラキールティの中観思想』、大東出版社、東京、2001。